

小 1 年

こんげ	お
ねん	ん
ひるたしゅん	か
	く

滋賀県書教育研究会長賞

蛭田 駿

小 1 年

あやの	く
ねん	つ
つるやまりあ	し
	た

京 都 新 聞 賞

鶴山りあ

小 1 年

きぶかわ	あ
ねん	じ
かまくら	ま
ら	い
ん	い

大津市教育委員会教育長賞

鎌倉虹香

幼 稚 園

なが	お
よう	だ
ご	ん
とう	い
ま	け
お	い

京 都 新 聞 賞

後藤茉緒

小 2 年

河西	ち	
二年	ま	子
北川	き	ど
しおり	を	も
	た	の
	べ	日
	た	に

京 都 新 聞 賞

北川 詩央梨

小 2 年

もの	ち	
べ	ま	子
二年	き	ど
ふじ	を	も
わら	た	の
まゆ	べ	日
	た	に

滋賀県教育委員会教育長賞

藤原茉優

小 1 年

なが	お
みな	ん
み	か
ねん	が
た	く
な	
か	
ゆ	
づ	

滋賀県書道協会賞

田中友都

小 1 年

あ	し
や	い
い	
ねん	た
お	に
お	け
た	
に	
せい	
ら	

滋賀県書道協会賞

大谷星楽

小 2 年

ぎ王 二年 くら川ひより

七	雨
い	あ
ろ	が
の	り
に	の
じ	空

滋賀県書道協会賞

黒川陽依

小 2 年

ながら 二年 うのゆづか

ち	
ま	子
き	ど
を	も
た	の
べ	日
た	に

滋賀県書道協会賞

宇野 優月香

小 2 年

あさひ南二年 田中かほ

れ	
し	小
そ	人
う	た
で	ち
し	は
た	
	う

滋賀県書道教育研究会賞

田中香帆

小 2 年

あ土 二年 にし川こな

も	花
ん	と
白	な
ち	か
	よ
う	し

滋賀県書道教育研究会賞

西川心菜

小 3 年

安ど 三年 おが本里佳

あ	
じ	雨
さ	上
い	が
の	り
花	
	光
	る

京都新聞賞

岡本里佳

小 3 年

高月三年 かたぎりなぎさ

せ	
	雨
で	の
ん	音
で	
ん	つ
虫	の
	だ

大津市教育委員会教育賞

片桐渚紗

小 3 年

米原 三年 川べもも

に	
走	子
り	犬
出	と
し	い
ま	っ
し	し
た	よ

滋賀県知事賞

川部 桃

小 2 年

のきた 二年 青みねゆい

木	か
か	み
げ	な
そ	り
よ	の
風	音

滋賀県書道協会賞

青峰 惟

小 3 年

旭南	に	
三年	広	大
金子	が	き
あおは	り	な
	ま	花
	し	火
	た	が
		空

滋賀県書道協会賞

金子碧波

小 3 年

かた田	つ	
三年	か	友
近	み	だ
どう	に	ち
ゆ	行	と
え	つ	
	た	せ
		み

滋賀県書道協会賞

近藤悠大

小 3 年

あざい	け	
三年	つ	小
川	こ	犬
むら	を	た
ら	し	ち
こう	た	と
き	よ	
		か

滋賀県書道教育研究会賞

川村洸揮

小 3 年

マキノ	び	
南		プ
三年	気	ー
平山	も	ル
実京	ち	で
	い	水
	い	あ
		そ

滋賀県書道教育研究会賞

平山実京

小 4 年

蒲生西	景	
四年	観	美
向井	を	し
まなか		い
	守	び
	ろ	わ
	う	湖
		の

京都新聞賞

向井愛佳

小 4 年

新旭北	強	
四年	く	野
高木	美	の
笑梨子	し	花
	く	の
	生	よ
	き	う
	る	に

大津市教育委員会教育賞

高木笑梨子

小 4 年

旭北	い	く	
四年	海	ら	し
伊庭	や	し	を
聖菜	山	を	高
	を	大	め
	大	切	る
	切	に	心
	に	す	と
	る	る	美
	心	心	し
	と	と	
	は		

滋賀県教育委員会教育賞

伊庭聖菜

小 3 年

しづ	音	
三年	で	夜
まが	目	中
みちえ	が	に
	さ	
	め	大
	た	き
		な

滋賀県書道協会賞

真神智恵

小 4 年

高月四年 岸田 ナキ	さ	
	ん	夕
	歩	方
	に	
	行	大
	く	す
		き
		な

滋賀県書道協会賞

岸田 紗希

小 4 年

玉川 四年 今 い ゆ 月	に	
	広	大
	が	き
	り	な
	ま	花
	し	火
	た	が
		空

滋賀県書道協会賞

今井 優月

小 4 年

河西 四年 上 品 か の こ	の	
	横	自
	顔	由
	を	帳
	え	に
	が	友
	く	だ
		ち

滋賀県書道教育研究会賞

上品 かのこ

小 4 年

河西 四年 奥 野 倫 世	白	
	い	大
	ひ	空
	こ	の
	う	か
	き	な
	雲	た
		に

滋賀県書道教育研究会賞

奥野 倫世

小 5 年

青柳小 五年 青 井 杏 愛	し	よ	
	な	り	す
	が	人	な
	ら	々	お
	成	の	さ
	長	気	と
	し	持	豊
	て	ち	か
い	を	な	
ま	明	想	
す	る	像	
	く	力	
		に	

滋賀県書道教育研究会賞

青井 杏愛

小 5 年

仰木 の 里 東 五 年 大 段 比 菜 乃		
	わ	見
	た	上
	雲	げ
	が	る
	飛	青
	ぶ	空

京都新聞賞

大段 比菜乃

小 5 年

南小 五年 越 智 文 那	た	
	豊	長
	か	い
	な	時
	言	間
	の	が
	葉	育
		て

滋賀県教育委員会教育賞

越智 文那

小 4 年

き生川 四年 青 山 咲 帆	白	
	い	大
	ひ	空
	こ	に
	う	く
	き	フ
	雲	き
		り

滋賀県書道協会賞

青山 咲帆

小 5 年

本庄五年	屋	
	根	温
	に	か
	ふ	い
中村芽音	り	日
	注	ぎ
	ぐ	し
		が

滋賀県書道協会賞

中村芽音

小 5 年

長小五年	大	ど
	河	ん
	に	な
	流	川
山本雄太	れ	も
	つ	最
	く	後
		は

滋賀県書道協会賞

山本雄太

小 5 年

桐原	大	
	地	牧
五年	を	場
	か	の
	け	馬
	る	が
		緑
		の

滋賀県書道協会賞

木下絢翔

小 5 年

速野五年	し	
	が	大
	の	き
	宝	な
	物	び
	だ	わ
		湖
		は

滋賀県書道協会賞

今井陸都

小 6 年

安曇	て	
	き	緑
六年	た	の
	春	風
中村柚奈	の	を
	野	は
	菜	こん

滋賀県書道協会賞

中村柚奈

小 6 年

今津東	も	法	昔
	意	は	から
六年	外	科	伝
	に	学	え
大久保舞乃	合	の	ら
	理	発	れ
	的	達	た
	な	し	技
	もの	た	術
	だ	今	や
		日	方
		で	

京都新聞賞

大久保舞乃

小 6 年

旭南	川	く	夜
	の	星	空
六年	よ	の	を
	う	間	見
福田愛友	に	を	上
	流	、	げ
	れ	白	る
	て	い	と
	行	雲	、
	っ	が	ま
	た	ま	た
		る	た
		で	

滋賀県知事賞

福田愛友

小 5 年

南比小五年	公	
	園	毎
	を	日
	散	早
	歩	く
	す	起
	る	き
		て

滋賀県書道協会賞

鬼頭茜音

小 6 年

仰木の里東 六年 佐々木英	美しく輝いて	美しい	雲海は日の出時に
	輝いて	美しく	雲海は日の出時に
	います。	美しく	雲海は日の出時に
		美しく	雲海は日の出時に
		美しく	雲海は日の出時に
		美しく	雲海は日の出時に

滋賀県書道協会賞

佐々木 英

小 6 年

金勝 六年 谷口ひより	航空機	新幹線
	で	
	移動	旅
	する	計画

滋賀県書道協会賞

谷口 ひより

小 6 年

長等 六年 大平綾乃	昔から	法は
	伝えられた	科学の
	技術や方	発達した
		今日で

滋賀県書道協会賞

大平 綾乃

小 6 年

西大路 六年 山岡あいら	短歌と俳句は	詩歌で
	日本独特の	古くから
	多くの	親しまれて
	人々	きました。

滋賀県書道研究会賞

山岡 あいら

中 1 年

野原夢虫 鳥風羽音 長北 一年 平野一花	野原夢虫	鳥風羽音
	百花息吹	春海季語

滋賀県書道研究会賞

平野 一花

中 1 年

南郷中一年 福林愛理	行列時計	校歌砂場
	動物銀河	和紙神技

京都新聞賞

福林 愛理

中 1 年

明富一年 原田怜奈	海は招く	強い日光
	湖上の輝き	美しい夜空

大津市教育委員会教育賞

原田 怜奈

小 6 年

今東 六年 中川ひなた	美術品の保管	印象的な画集

滋賀県書道協会賞

中川 ひなた

中 1 年

滋賀県書道協会賞

東 香那

数学の世界そのものは整合的で美しいが、
だからといって、それを語るために用意した
言葉が美しいとは限らない。
彦根西中 一年 東 香那

滋賀県教育委員会教育長賞

松井 嵩磨

上海は海に面して発展した街。上海
料理といえば、様々な海の幸を使ったものが
中心で、甘辛く濃いめの味付けである。
高月中二年 松井 嵩磨

中 2 年

京 都 新 聞 賞

高岡 蓮

短歌や俳句は日本独特の詩だ
柿食へば鐘が鳴るなり法隆寺
湖西 二年 高岡 蓮

滋賀県書道教育研究会賞

篠内 里帆

新生 夏雲 太陽 涼味
入梅 更衣 都草 自然
草津 二年 篠内 里帆

中 2 年

中 2 年

滋賀県書道協会賞

坂口 瑠弥

親ゆずりの無鉄砲で子供のときから損ばかり
している。小学校にいる時分、学校の二階から飛
び降りて、一週間ほど腰を抜かしたことがある。
「坊っちゃん」より 瀬田北中 二年 坂口 瑠弥

滋賀県知事賞

篠内 愛香

行列 時計 動物 銀河
校歌 砂場 和紙 神技

中 3 年

京 都 新 聞 賞

須山 美咲

たとえば君が 傷ついて
くじけそうになった時は
かならず僕がそばにいて
ささえてあげるよ その肩を
世界中の 希望のせて
この地球は まわってる
いま未来の扉を開けるとき
悲しみや 苦しみが
いつの日か 喜ばに変わるだろう
I believe in future
信じてる
もしも誰かが 君のそばで
泣きだしたら 僕は
だまて腕をとりながら
いっしょに歩いてくれるよね
世界中の やさしさで
この地球をつつみたい
いま兼直な 気持ちになれるなら
憧れや 愛さが
大空には びけて輝るだろう
I believe in future
信じてる
~「BELIEVE」より~
河瀬 三年 須山 美咲

滋賀県書道協会賞

福岡 佳奈

夕景の中、一面の菜の花が広がる大地。
郷愁を誘う光景が心に映しだされます。
仰本 三年 福岡 佳奈

中 3 年

滋賀県書教育研究会会長賞

北川 温子

雲の峰雷を封じし聳えけり 漱石
 竹の子のふときも親のめぐみかな 宗鑑
 水ふんで草で足ふく夏野かな 来山
 立命館守山高校二年 北川 温子

滋賀県書道協会賞

三上 紗輝

筆には毛の柔剛、穂の長短の違いがあり、墨には濃淡
 滷濁等の使い方があります。紙は、その両者を助け、
 働きをします。が、紙自身の質によっても書の効果か
 変わります。墨は濃くさえあれば良い、というよう
 ものではありません。 大津高二年 三上 紗輝

滋賀県書道協会賞

北川 希

銀河 自然 新緑 独創
 太陽 現代 調和 流星
 彦根総合高校 二年 北川 希

滋賀県書道協会賞

藤田 瑞季

翌日、梅雨の晴れ間の午まえ、潮の迎えでたまきと瑞子は近江路へと汽車が入った。
 鈴鹿山脈を背に、前面に琵琶湖をみる近江盆地に近江八幡はある。その先は安土であり、
 更に先は彦根市だと彼は思った。近江八幡駅には大室家の手配した車が待っていた。
 町は静かで、人の出盛ることなく、町筋は真直に幾茶にも伸びて、京街道とよばれる
 通りと交差する。潮が大通りの一側横通りをえらんで車を走らせると、両側は旧街道の
 趣きを残して、京都に似た格子作りの町屋がひしひしと軒を並べていた。
 芝木好子、群青の湖より 膳所高校二年 藤田 瑞季

滋賀県知事賞

多賀 帆乃花

沖繩の生命の営みを司った文化、それはシャーマンだ。森羅
 万象に魂の存在を感じ、それにより、命の尊厳を見つめて行くもの
 だ。それは何よりも祖先の魂を尊ぶという信仰が強く、御嶽と
 呼ばれる聖地を持つ、いるから。 喜納昌吉の文より
 伊吹高校三年 多賀 帆乃花

京都新聞賞

重田 乃胡

まだこの世界は僕を飼いだらしてない
 みたいだ。望み通りいいだろう美しくも
 互いの砂時計眺めながらキスをしようよ
 「だよなら」から一番遠い場所で
 待ち合わせよう
 ついに時はまた昨日までは序章の序章で
 飛はし読みでいいからここからが
 僕には経験と知識とカピの生え
 分た。た勇気を持ってはたかかってない
 スピードで君のもとへダイブを
 まどろみの中で生温いコラに
 こでないどこかを夢見たよ教室の窓の
 外に電車で揺られ運ばれる朝に
 運命だと分る未来と分る言葉が
 どれだの事を伸ばそうと届かない
 場所で僕ら恋をする時計の針も
 二人を横目に見ながら進む
 こんな世界を二人で一生いや、何章でも
 生き抜いていこう
 「はじめまして」なんてで遠かり彼方へと
 追いやて1000年周期を一日で息しよう
 辞書にある言葉で出来上がった
 世界を憎んだ
 万華鏡の中で八月のある朝
 君は僕の前でハニカんでは澄まして
 みせた。この世界の教科書のような
 兄弟社高 3年 重田 乃胡

滋賀県書教育研究会会長賞

中村 瑠華

書は同じ文字を書いても人によって表現が異なる
 のが普通で、その場合の固有の持ち味や趣きの違いを
 書風の違、という。書風には、筆者の個性だけでなく
 民族性、社会性、時代性なども反映し、その在り方は、
 多種多様である。 堅田高三年 中村 瑠華

滋賀県書道協会賞

宮村 愛佳

悲しげに咲く花に君の面影を見た
 大好きな雨なのに何故か今日は冷たくて
 淡く儚く夜に揺られて
 溜め息一つ墜ちた花びら
 月の欠片を集めて夢を飾り 眠る
 時の砂散りばめてもあの頃に還れない
 ふと見上げた星空また君をさがしてた
 いくつ夜を越えれば涙は強くなる
 季節は巡り 森は染められ
 風は奏でて 想い溢れて
 逢いたくて愛おしくて触れたくて苦しくて
 届かない伝わらない叶わない遠すぎて
 今ほもう君はいないよ
 散り逝くを知る花はそれでも
 強く生きてる 色無草かに
 月の欠片を集めて夢を飾り 眠る
 時の砂散りばめてもあの頃に還れない
 逢いたくて愛おしくて触れたくて苦しくて
 届かない伝わらない叶わない遠すぎて
 今ほもう君はいないよ
 「眠花」伊吹三年 宮村 愛佳

滋賀県知事賞

西本聖子

長居した茶室を出てゆく、と階段を下りる途中、誰かに呼びとめられたような懐かしい声、それは遠く昔の自分の声だ夫かもしれない、そんな時を閉じ込めた幻想的な九分の一の北に居ると、市内の夜半では、兄妹とそぞろ歩いた故郷の縁目を想い出す、自分が若かった頃と、今、あの地の雲間気が重なるといって、この見覚えのある懐かしい懐かしい、それは、既視感のせいで、郷愁とは過ぎてしまった時間や情景を愛おしくも、もれなく、それによって満たされた心はふくくと蘇り、その先には前向きな自分が待っているはずだ、活気を癒や、縦横無尽な、台湾時空の、箱は、次に何をさせてくれるのだろうか、青山、西本聖子

一般

一

京都新聞賞

田中希京

春はあけぼの、やうやく白くなれゆく山は、少しあかり、蝶だちる雲の細くたがひきたる。
夏は夜、月の頃はさらなり、開もなほ、霞の多、飛び違ひたる、またたき二つなど、(玉のかにうち光りて行くもをかり、雨など降るはか。
秋は夕暮れ、夕日をして山の端いと近うなりたるに、鳥の、寝どあへ行くとて、三つ四つ、二つ三つなど飛び急ぐさあはれなり、まて、雁などの連ねたるが、いと小さく見ゆるは、いとをかし、日入り果てて、風の音、虫の音など、(たま言ふべきにあらず。
冬はつめて、雪の降りたるは言ふべきにもあらず、霜のいと白きも、おとせざともいと寒きに、火など急ぎ燃は、炭もて渡るも、いとつきざし、昼になりて、ぬるくゆるびもていけば、火桶の火も白き灰がちになりて、おろし。
桃草子 春はあけぼの
年横 田中希京

一般

一

滋賀県書道協会賞

箕浦恵子

書空はモノクロ写真で濃く灰色で再現されることが多い、それを見て我々は理想の書空を思い描くことが出来る、世界で一番青い空は心の中にある、くわから先もブルムが発達し、フィルターが進化して、カラー写真で現実を捉えるようになった書空が見えらるだろう、それでもモノクロ写真の灰色はいんなに鮮やかに撮られたカラー写真よりも、いつだって何人の少く青い、モノクロ写真の魅力は想像力を味方につけてくれることかもしれない、文化 箕浦恵子

一般

一

滋賀県書道協会賞

仁波美子

書空はモノクロ写真で濃く灰色で再現されることが多い、それを見て我々は理想の書空を思い描くことが出来る、世界で一番青い空は心の中にある、くわから先もブルムが発達し、フィルターが進化して、カラー写真で現実を捉えるようになった書空が見えらるだろう、それでもモノクロ写真の灰色はいんなに鮮やかに撮られたカラー写真よりも、いつだって何人の少く青い、モノクロ写真の魅力は想像力を味方につけてくれることかもしれない、文化 箕浦恵子

一般

一